

平成 27 年度 大学院工芸科学研究科 秋入学宣誓式 学長告辞

本日ここに入学式を迎えた大学院博士前期課程 12 名、博士後期課程 33 名の皆さんに対し、京都工芸繊維大学を代表し、心から歓迎の意を表します。

今日、皆さんの新しい力を迎え入れることができたことは、京都工芸繊維大学にとって、誠に大きな喜びであります。新入生の皆さんは、希望と喜びをもって、今日の入学宣誓式に臨まれたことと思います。

京都工芸繊維大学は、理工系の単科大学であり、科学と芸術の融合を目指して教育研究活動を行っています。洗練されたモノづくりを行い、それを文化にまで高めてきた京都の地の利を活かし、いま京都工芸繊維大学は、グリーンイノベーション、ライフイノベーション、カルチャーイノベーションの 3 つの領域において、実践的なモノづくりを通じて教育研究を行っています。

住むなら神戸、働くなら大阪、そして勉強するなら京都とよく言われますが、さらに梅原猛先生は、100 年の真理を学ぶならば東京で学べ、1000 年の真理を学びたいのならば京都で学べと言われたとおっしゃっています。

我々理工系大学において、1000 年の真理を学ぶためには、リベラルアーツの幅を広げることが重要であり、そのためには、文系の学問領域を参考にして考えることが有効ではないかと思われます。

例えば、東京大学教養学部の基礎演習テキストにおいて、小林康夫教授は大学における学問のあり方について次のように述べています。

学問的な成果は、個人の好みや主観によって左右されるのではなく、誰にとっても了解可能であり、説明可能な論証能力をもった普遍的なステートメントでなければならない。これはまた再検討が可能であり、納得いくまで反論と肯定を繰り返すことができる形式が必要である。すなわち、学問の成果は多数の人が議論に参加できるように開かれていることが肝要である。

このように大学における学問は、主観的な一人ごとを超えて、不特定多数の人に認められるような普遍性を獲得することが大切であるとされている。我々は、科学的な言説を習得することによって普遍的な言語を話す主体とならなければならない。実際、微分方程式のような普遍的な数学言語を習得することによって、普遍的な言語の扱いを身につけ、知の共同体において相互にコミュニケーションをとることができるようになるのである。

一方、文系の学問分野ではどうか。文化系の学問領域では数式による記述にはなじまない主題、数量化し得ない対象にこそ関心が向けられている。数量的な取り扱いを拒否し、数量化にあくまで抵抗する対象とは、何か。それはもちろん人間であり、人である。人間あるいは人間が作り出した文化事象、社会現象、歴史などは数式に還元されない多元的な対象であり、実験や再現性にもなじまない事象である。

特に研究対象と研究者の関係は、対象が自然や物質やモノではなく、人間であるために、対象と研究主体が分離していることを前提にすることができない。理系の学問では、主体と対象は相互に独立であり、普遍的な立場であることを前提としているが、文系ではこのことが保証されていない。

このことから、文系の学問では、唯一つの真理ということを経験にした研究活動を行うことはできない。非常に重要で理解しがたいことがらではあるが、Aにとっての真理とBにとっての真理は両立することを前提に、時代の制約の中での歴史的事象、地理的制約、といった立体的な視点から文化的事象を比較することが研究活動の前提とされるのである。

このように大学における学問のあり方を、文系と理系に大別してみていくと、理系では自然や物質を研究対象とし、唯一普遍の真理への到達を目指すのに対し、文系の研究対象は、突き詰めれば人間であり、研究者は研究対象に関して客観的な立場をとることが困難であり、解の多様性を前提として研究を行うこととなります。したがって必ずしも、当初から唯一普遍の真理を求めて研究を行っているわけではないのです。

ここで、教養教育というものを考えてみましょう。おそらく教養とは、自分にとってどうしても気になる事柄、簡単に答えは出ないかもしれないがわかりたい事柄、長い時間をかけてつきあう価値のある問題、こうした課題との出会いから始まるのではないのでしょうか。

あえていえば、教養とは他者を説得するための技術ではなく、自分にとっての真理を発見する作業のことではないでしょうか。

今日から行われる研究室での皆さんの教育研究活動が、時には大学の大きな活動方向と同じベクトルを持っていることを確認しながら日々の実践を行っていただきたいと思います。そして、専門知識を動員するだけではなく、自分にとって困難な問題、一生かけて取り組むべき問題に出会うことを期待しています。そして本学における教育研究を通じた経験のすべてを、自らの知的財産として自分の中に登録されることを期待します。

さて、結びに当たって、最近発表された日経新聞の調査では、本学の学生・卒業生の評価が極めて高いことが示されました。上場企業の人事担当者の評価では、全大学 800 校中、総合 14 位、独創性では 9 位の評価を得ています。朝日新聞の調査では、本学の学生の勉強時間の長さがベスト 10 に入っており、よく勉強していることが示されています。こうした学生の努力が社会から認められているという事実は大変うれしいことであり、皆さんも自信と誇りを持って本学での学習と研究に打ち込んでいただきたいと思います。

皆さんの大学院における学生生活が実り多きものとなるよう、また、皆さんの活動によって、本学の研究力の向上、ひいては人間社会の知的財産が豊かになることを、念願しています。

平成 27 年 9 月 25 日
京都工芸繊維大学長
古山 正雄